

【選考委員】右から)高野秀行氏、古市憲寿氏



「週刊ポスト」「女性セブン」「SAPIO」主催

『家族写真 3・11原発事故と忘れられた津波』

笠井千晶(ドキュメンタリー監督・ジャーナリスト/44歳)

大賞
賞金
300
万円

第26回「小学館ノンフィクション大賞受賞作発表」

第26回

小学館ノンフィクション大賞受賞作発表

受賞作品のあらすじ

これほどの悲しみを、人はどう乗り越えて生きるのか――。

舞台は、東日本大震災後の福島。物語の主人公は、南相馬市で津波にさらわれた我が子を捜しながら生きる上野敬幸さん(47歳)だ。自宅があつた葛浜地区は、津波で集落の7割が流失。上野さんも両親と幼い2人の子どもの家族4人を津波で亡くした。その後、22キロ先の福島第一原発が爆発する。

「ずっとおいてきぱりだ、

ここは」。カメラに向かってつぶやく上野さんがいた。

福島の津波被災地は、原発事故が起きたために世の中から目を向けられなくなつたという。警察も自衛隊も来ない中、上野さんは避難を拒み、仲間と自力で搜索を続けた。泥の中から見つけた8歳の長女の遺体を自ら安置所に運び、3歳の長男や他の行方不明者を捜し続ける。



笠井千晶(かさい・ちあき)
1974年山梨県生まれ。ドキュメンタリー監督。静岡放送、中京テレビに勤務の後、2015年フリーに。ドキュメンタリー映画『Life 生きてゆく』(2017年)で、第5回山本美香記念国際ジャーナリスト賞受賞。

高野秀行 (ノンフィクション作家)

心の壁を写し 出すような筆致



生きてゆく』のストーリーだった。映画では表現しなかった部分として、今回は、カメラを回す私自身と福島の津波被災地との関係性を軸に書き進めていった。福島を往復しながら、時間経過と共に信赖関係も深まり、カメラに向かって話してくれる内容はより深く、重く変化していく。大切な人を亡くした遺族が、その死にどう向き合い、目を背け、絶望から希望を見出していくのか。それは人間の安易な想像を超えた奇跡のありのままに執筆した。

当時暮らしていた名古屋と福島を往復しながら、時々福島を往復しながら、時間が経過と共に信赖関係も深まり、カメラに向かって話してくれる内容はより深く、重く変化していく。大切な人を亡くした遺族が、その死にどう向き合い、目を背け、絶望から希望を見出していくのか。それは人間の安易な想像を超えた奇跡のありのままに執筆した。

今回は例年にも増して文章除外でた作品が揃い、それが選考を難しくさせた。『ある人の渡米記録』は、アメリカでの保育や教育のあり方を二児の母親として、夫の存在があまりに希薄であり著者が家庭的基本的な生活が謎に包まれていることや、全体を通してのトマがないことなどが残念だった。書籍よりはブログに掲載する方がふさわしいだろう。

『空気』の代弁者は丹野秀行(たのひでゆき)1966年東京都生まれ。アジア、アフリカなどの辺境地をテーマとしたノンフィクションやエッセイを多数発表。『ミャンマーの柳生一族』『謎の独立国家ソマリランド』『謎のアジア納豆』『辺境メシ』『世界の辺境とハードボイルド室町時代』(共著)。

テレビ局に勤めていた著者は、ビデオカメラを手に休日に訪れた南相馬市で、偶然上野さんと出会った。以来、自宅のある名古屋から夜行バスとレンタカーで片道13時間以上かけて、毎月福島に通う。そして上野さんと妻、震災の年に生まれた次女の日常に寄り添つていく。

やがて上野さんは、第一原発から3キロの大熊町で娘の捜索をする木村紀夫さんと出会う。木村さんの捜索を続ける著者は、テレビ局を辞め、ドキュメンタリーや映画を作ろうと思い立つ。大切な家族を亡くした人たちの7年にわたる心の変遷を丁寧に描き出す。

笠井千晶

受賞者の言葉

安易な想像を超えた奇跡の連続

「あなたに『書く』という世界を経験して欲しい」――昨年の春、初対面の私は声を掛けてくれたのは、一人のベテラン作家だった。その勧めがなければ、私がこの作品を執筆することは

なかつただろう。自分の表現の場はあくまで映像の世界だと思ってきたからだ。思いがけず訪れた、初めてのノンフィクション執筆の機会。選んだ題材は、2年前に自主制作したドキュ

ムを手伝ううち、原発周辺で行方不明者の捜索が十分に行なわれていないことに怒りを募らせる。そして5年9ヶ月後、捜索に奇跡的な場面が訪れる。一方で上野さんは、原発事故の加害者である東京電力の社員たちとも、心を通わせていく。「会社は憎いが、社員一人一人は別だ」と語る。そして南相馬市に通い続ける著者は、テレビ局を辞め、ドキュメンタリーや映画を作ろうと思い立つ。大切な家族を亡くした人たちの7年にわたる心の変遷を丁寧に描き出す。

熱のこもった議論を重ねた
選考委員3人。最後は、全
会一致で大賞を選出

やんのお父さんであるハオさんが著者に心を許していない。というよりも、リンちゃん殺害の被疑者(被告)は罪状を否認しており裁判も続行中で、まだ事件が収束していないよう見える。裁判が一段落して、ハオさんの心境が変わったときに再度、執筆・書籍化したらどうだろうか。

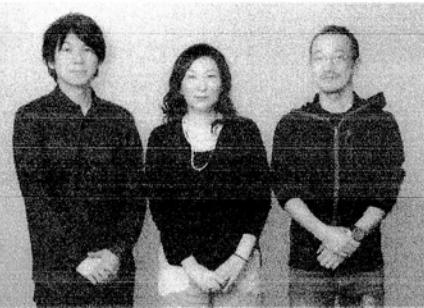
『大阪都構想外伝』は、個人的には最も心惹かれた作品だった。好奇心は人一倍強いがおつちよこちよいの著者は自らを夏目漱石の「坊っちゃん」になぞらえ

者の執念に驚かされる。原発事故のおかげで津波犠牲者の捜索が十分になされなかつたという一般には知られていない実事を明らかにしつつ、わが子を今でも探し続ける上野敬幸さんの心

の襲の一枚一枚を書き出すかのような筆致も見事。視野が狭すぎて周囲の状況が今一つ明らかでないといふ欠点を書籍化の際に補えれば大賞にふさわしい作品だと思う。

さなかつた。日本で暮らすベトナムのかたたちのコムユニティについてももっと知りたいなど感じたので、まずはそちらを重点的に我々読者に伝えていただきつつ、取材を続行されるのはいかがだろう。

『空氣』の代弁者』も、大勢にインタビューし人柄を活写する著者の取材力に脱帽した。ただ、終章があまり練られていない気がする。「新しい歴史教科書をつくる会」の成立過程、メンバーの個性、分裂などがものすごくおもしろかった



古市憲寿

(徐々に取材対象者と親しくなつていく) といふ構成は現状のまま(いい)。作品の精度が上がるはずだ。

実は選考会が始まる直前まで「これ」という一作品を決められなかつた。『家族写真』は、東日本大震災を経験したある家族の記録。8年にわたる日々が丁寧に綴られている。何度も現地に足を運んだ著者だから書けた作品なのだろうから力作なのは間違いない。た

共通していた 主題の不明瞭さ

中々焦点を結ばない。著者の提案である「家族写真」をタイトルにするのも少し無理があると思つた。

(徐々に取材対象者と親しくなつていくといふ構成は現状のままでいい)、作品の精度が上がるはずだ。

だった。しかし「構成が弱い」という傾向も感じられる。読者によりよく伝わるか、取材／経験した事柄を文草稿化する際に、「どうすれば読者をもう少しだけ練ってみないと、だけれどと思う。

ている。実際、何の縁もない大阪・西成に乗り込み、あれこれ騒動に巻き込まれる様子は「坊っちゃん」そのもの。現場の雰囲気もよく描かれている。ただ、いくつかの文書の書き込みが粗いとの「坊っちゃん」と呼ぶには著者の年齢が行きすぎている（六十六歳）のが惜しい。

『家族写真』は七年間、百数十回も仕事の合間に縫つて名古屋から福島県南相馬市に通つて取材を続けた著

行動していく大きさを楽しんでくれる。ただ、ややエピソードの羅列っぽくなってしまっているのが惜しい。

『ある人の渡米記録』は、著者がなぜ移住することになったのか、前職はなんなのか、などが冒頭ではつきり説明されていないため、話に入りこみにくい。夫が家事や子育てにほとんどタッチしていないように見えるので、そこも塩梅を一考したほうがいいだろう。し

なによりも真摯に自身と向かい思案する著者の姿勢に、敬意と好感を抱いた。『リンちゃんへの約束』は非常に重要な問題提起で、著者の誠実な取材から、私は他者に対する理解と想像力について考えるきっかけを得ることができた。しかし、取材がまだ途上ということも否めず「裁判が結審していないし、とても繊細なテーマなので、単純に『取材が終わる』はずもないのは当然だ」、悩んだが大賞には推

「家族写真」は、著者の粘り強い取材が人々の思いを引き出し、浮き彫りにしていく素晴らしい作品で、私は一大早一泣いてしまった。同時に、現実をなにも知らず、知ろうともせずにいた自分への怒りと恥ずかしさがこみあげた。ただ、時系列がややわかりにくいので、情報提示のタイミングについて整理、一考していただければ幸いです。

と『FACTFULNESS』が併売されているなど、提示するデータの選び方にモーセンスを感じる。しかし分析視座がかつて小熊英二の提示した「普通」という言葉に引きずられすぎているのではないか。また「右派市場」の源流を探るという趣旨なら伊藤昌亮『ネット右派の歴史社会学』(青弓社)といった力作に軍配が上がる。

取材にかけた時間が作品の質を決めるとは思わないが、候補作を並べた時に、「どうしても『家族写真』の『物量』は圧倒的だった。度が上がっているはずだ。

『リンちゃんへの約束』は、随所に「プロ」らしさが光る作品。クラスでの机の上に花を置くかどうかのやり取り、タクシー運転手の心ない一言など、情報の切り取り方が上手だった。ただしも裁判が続く事件を扱っているため、ある種の「告発」として世に問う意味はあると思うが、「ノンフィクション賞」とは相性が悪いように感じた。

『大阪都構想外伝』は、一言でいえば「勿体ない」。せっかく西成を内部から観察できる立場にあったにもかかわらず、記述がどこか表層的なのだ。たとえば作中ではある怪しい噂について言及されるが、それを解明してこそそのノンフィクシ

ヨンだと思う。

「ある人の渡米記録」は非常に軽妙で読みやすい。母や女性という立場の葛藤もよく感じられた。しかしハロウインのルールや水筒がだめな理由など、「もっと突っ込んで聞いてよ」と思う箇所がたくさんあった。

自戒を込めて書くが、多くの作品に共通していた欠点は、何を明らかにしたいのかが不明瞭なこと。著者の動機や主張が不明瞭な作品は、どうしても読者が置いてきぼりを食ってしまう。

主役が活躍しない映画が退屈なように、面白いノンフィクションでは著者や登場人物が大活躍する。これが最も傑作がこの賞から生まれることを祈っている。

【小学館ノンフィクション大賞事務局より】第26回をもって3人の選考委員は任期を終え、次の第27回から新たな選考委員へと交代します。新選考委員は、星野博美（ノンフィクション作家）、白石和彌（映画監督）、辻村深月（小説家）の3氏。ご応募、お待ちしております。

(作家) 三浦しをん 涙と怒り、恥ずかしさを覚えた

の翼の一枚一枚を写し出す
かのような筆致も見事。視
野が狭すぎて周囲の状況が
今一つ明らかでないという
欠点を書籍化の際に補えれば
大賞にふさわしい作品だと
思う。

さなかつた。日本で暮らすベトナムのかたたちのコミュニティについてももっと知りたいなど感じたので、まずはそちらを重点的に我々読者に伝えていただきつつ、取材を続行されるのはいかがだろう。